明治落語録音資料に見られる江戸・東京語音声について

三原裕子

特定の時期・地域の言語生活を知るためには、該当する時期の言語生活を反映した文献資料から読みとるか、歌舞伎や能のような芸能関係の伝承等から推定していく以外に、今のところ方法がない。

どんなに、詳細に当時の姿を写した文献であっても、音声を網羅的に表記することは不可能に近く、規範意識の高い作り手たちであればなおさら実音からは離れていく。私が調査している「江戸・東京方言」にしても、江戸後期の洒落本や咄本に「お前」と書かれているものが「オメエ」なのか「オマエ」なのかは、表記の陰に隠れてわからない。実生活では「イッチャア」と言っても、文章になれば「いっては」と写される場合が多かったことも推測される。

この紗がかかったような幕末の言語生活をある程度知る手掛かりとして、明治に収録されたレコード資料が挙げられる。

量的にはさ程多くはないが、「当該期の音声」を音声として聞くことのできる資料として有効である。

録音資料、特に二十世紀初頭の落語・演説資料に関しては、清水康行氏に多くの論考があるが[一]、ここでは、幕末生まれの江戸落語家数人について、録音資料に現れた東京方言の特徴を紹介する[二]。

演者は言語形成期の、凡そ五歳から十五歳を幕末から明治初期に過ごし、旧市内で生育した東京方言話者である。録音は『落語名高席全集』（日本コロムビア）収録のものだが、コロムビアの前身である日米蓄音器商会時代に吹き込まれたもの等もある。演者、題目等は次のようである。（演者・出生年・生育地・演目・収録時期）

A　初代三遊亭円遊　嘉永2年（一八四九）小石川小日向水道町『太鼓の当込』収録明治36年以降

B_1　五代目三桝家小勝　安政5年（一八五八）麻布『区画整理』収録昭和4

B_2『米屋の腹切り』収録時期不明

C　初代三遊亭円右万延元年（一八六〇）出生地不明『鍋草履』・大正13年1月発売

D　三代目蝶花楼馬楽　元治元年（一八六四）芝『長屋の花見』　収録明治42年頃

E　三代目柳家小さん　安政3年（一八五六）一ッ橋藩士の子として出生『粗忽長屋』収録時期不明　（以下、演目はABCで略記し、音韻特徴の部分は片仮名で表す。）

音韻的特徴として江戸・東京方言で、よくいわれるものには「ヒ」が「シ」に発音され易い傾向が挙げられるが、録音で聞く限りでは、ほぼその区別がなされている。「ヒ」が「シ」になっていたのはB_1「飲んだ日（シ）にゃあ」「指と指が引（シ）っかかって」や

Cの「力ある人（シト）」他2語に留まり、一個人の中でも、「ヒト」と「シト」が現れたり（B_1）と、ゆれが見られた。

調査した録音資料中「ヒ」が「シ」になり易い13語（延べ70語）に限っても[三]その九割が適正に区別されていて、『浮世風呂』[四]や『和英語林集成』[五]に見られるような混同の様子は観察できない。文化六年刊の三笑亭可楽『しんさく落としはなし』には「四百貸せ、四百貸せと浮かはねへ船幽霊のやうに」と啖呵を切る場面があるが、これは「四百（し）」と「柄（ひ）杓」を掛けた地口が効果を上げているわけで、江戸庶民に「ヒ」と「シ」は混同し易い」ことの共通認識がなくては、成り立たない笑いである。昭和五十年代に調査がなされた『東京都言語地図』[六]でも、明治末から大正期出生の老年層の「ヒ」を「シ」と発音することが多く報告されているが、本調査ではこの傾向が予想した以上に少なかった。

これは、録音した落語家の生育地が麻布・芝・小石川と旧市内でも、山の手に位置する者が多かったことが一因であろう。旧市十五区の内、所謂下町の日本橋・神田・本所・深川等の出身者には修正が難しい「ヒ」→「シ」も、これら山の手出身の落語家には、録音収録と言う改まりの場においては、修正が可能であったと考えられる。一ッ橋藩士の子であった三代目柳家小さんのような特殊例は除いても、幕末から明治期、その修正力の有無は、教育効果と共に、地域差に大きく影響されていたことが推測される。これは、録音資料から確認され得ることの一つである。

また、Aの「スイド（水道）」、Dの「ビンボ神（貧乏）」など本来は長音で発音されるものが、短く発音されている例やB_1の「発端（ホッタン）」、同B_2の「舎利骨（シャリッコツ）」前述小さんEの「浮名（ウキナ）」等、今とは違う古いアクセントも聞くことが出来る。「味噌津」「味噌吸い物」（C）等、現代では殆ど死語化していると思われる語がごく普通の語として多用されていることなど、報告すべきことは多いが、録音資料を通して垣間見ることの出来た幕末から明治初期の江戸・東京方言の一端を紹介するに留める。

一 清水康行「快楽亭ブラックと平円盤初吹込」『国文鶴見』16 一九八一、「二十世紀早期の演説レコード資料群に聴く合拗音の発音」『名古屋大学国語国文』64 一九八九他

二 東京語の音声、アクセントの特徴と変容については秋永一枝『東京弁アクセントの変容』一九九一に詳述がある。

三 一拍語の「日」「火」、語頭の「人」「一（ひと）」「低い」や、既に出現が報告されている「広」「百」等の語、13話8人から得たものを対象とした。

四 式亭三馬（文化六）二編上「まだまア「しやくにんし」トはいで頼母しいナ」と上方女が江戸のヒ→シを揶揄する場面がある。

五 J・C・ヘボン（1886）序文「方言」「hi は shi となり、例えば hibachi（火鉢）は shibachi……と発音される。」

六 昭和61年9月発行 東京都教育委員会

＊本文中に引用しなかった調査テキストは以下である。

A円遊『野ざらし』C円右『三人旅』／D馬楽『長屋の花見』（別話）／E小さん『うどんや』／F柳家小せん『専売芸者』明治一六年（一八八三）生／G四代目橘家円喬『二人ぐせ』慶応元年（一八六五）本所松坂町生／H四代目橘家円蔵『吉原ぞめき』明治元年（一八六八）浅草柳原生